別本『仲景全書』の書誌と構成書目

真柳　誠

『仲景全書』は明の趙開美が万暦二十七年（一五九九）に刊行した医学全書である。同書は現存『傷寒論』中の最善本である『宋板傷寒論』を編入することで著名だが、他に『金匱要略方論』『注解傷寒論』『傷寒類証』が収められている。この趙版は日中両国に計七組現存するが、趙版そのものは両国ともに以後一度も翻刻されていない。

一方、趙版とは構成書を異にする別本の『仲景全書』があり、江戸および清末民国間に幾度も刊行されている。しかし各々の由来はいまだ明らかにされておらず、しばしば趙版と混同されているのが現状である。そこで筆者は各『仲景全書』の相互関係を調査し、いくつかの新知見を得たので報告したい。

（一）和刻『仲景全書』　和刻版は以下の五版元から印行されているが、いずれも同版本である。㈠万治二年（一六五九）寺町弥兵衛らの刻本。刊記に「開板」とあり和刻の初版かと目される。㈡寛文八年（一六六八）秋田屋総兵衛印本。㈢寛文八年（一六六八）上村次郎右衛門印本。㈣宝暦六年（一七五六）出雲寺和泉等十書坊共印本。㈤寛政元年（一七八九）芳蘭榭蔵版・林権兵衛ら印本。

この和刻版は『集注傷寒論』『金匱要略方論』『傷寒類証』の計三書よりなる。つまり趙版から『宋板傷寒論』『注解傷寒論』を除き、代わりに『集注傷寒論』十巻が加えられている。『集注傷寒論（張卿子傷寒論）』は、張遂辰（卿子、一五八九～一六六八）が成無己の『注解傷寒論』に計二十五医家と自己の注を追加した書である。『傷寒論』本文と成注という実用部分を考えると『宋板』『注解』はほぼ本書に含まれており、趙版が和刻版の編成に改められる理由は自明であろう。

ところでこれら和刻版『集注傷寒論』の扉書を見ると、㈡～㈤はいずれも「張卿子先生手定仲景全書云々」と記され、あたかも張卿子が『仲景全書』を編纂したごとくである。しかし㈠のみは「張卿子先生手定傷寒論、成無己註附

諸名家、聖済堂蔵版」と記され、誤解を招くことはない。しかも中国に現存の清初刊『張卿子傷寒論』七巻も同じく聖済堂蔵版とある。かつ七巻本『張卿子傷寒論』と十巻本『集注傷寒論』の巻一～六は全く同一。そして十巻本は七巻本の巻七を巻七～九に分巻、さらに七巻本にない『注解』の巻十をそのまま付加し、計十巻としている。また『注解』の序・目録なども付加されている。

以上より和刻版㈠は、聖済堂版『張卿子傷寒論』七巻本を十巻本に改編。これと趙版『金匱要略方論』『傷寒類証』を合刊したものであることがわかる。そして㈡以降、扉書も「仲景全書」に改刻され、ついに別本『仲景全書』が確立されるに至ったのである。ちなみにこの改編は日本でなされている。それは本来の七巻本にない『宋板』『注解』による校異の頭注が、十巻本の各所に㈠段階より刻されていることから知れる。中国版の翻刻に際し、単に返り点などの刻入にとどまらず、このような改編と校異がなされていることは、江戸前期すでに医学古典研究の下地が相当に醸成されていたことを示している。

(二) 清末・民国刊『仲景全書』 清末民国間には以下の三回刊行され、いずれも版式等の細部は相違するが構成書は同一である。㈥光緒二十年（一八九四）崇文斎鄧氏刻本。㈦民国五年（一九一六）千頃堂書局石印本。㈧民国十八年（一九二九）受古・中一書店石印本。

これらは『集注傷寒論』『金匱要略方論』『傷寒類証』、および『傷寒明理論』『運気掌訣録』の計五書からなる。つまり和刻版に『傷寒明理論』『運気掌訣録』の二書が加えられた構成である。これらに前付の胡乾元が光緒十八年（一八九二）に記した「重刊仲景全書叙」には、刊行に至る事情が述べられている。それによると乾元は長孫より、上海に来ている日本人の医家が和刻の『仲景全書』を所持しているのを聞き、長孫を通じ懇願して借出。成都の鄧少如氏に翻刻を依頼したという。

この序文より㈥本は和刻版を底本に二書を増補・翻刻されたもので、㈦㈧本はそれを翻印したものであることが知られよう。事実㈥㈦㈧本の『傷寒類証』巻末には、いずれも㈣本と同一の刊記が忠実に翻印され、さらに返り点は除去されているものの、和刻版の頭注もそのまま踏襲されている。

以上、明・趙開美版の『仲景全書』とその日・中の別本、およびそこに編入された『集注傷寒論』十巻と『張卿子傷寒論』七巻に関する相互関係を考察した。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

医師赤川玄櫟と松岡茂章

田中助一

第八十九回日本医史学会総会が新潟市で開催されることとなったので、明治初年に新潟で活躍した二人の長州出身の医家（赤川玄櫟と松岡茂章）について紹介したいと思う。

㈠赤川玄櫟（一八三七～一九〇三）

天保八年三月十七日に萩藩医品川玄良（針医、岡崎玄隣伝）の二男として萩の西南郊奥玉江に生れた。幼名を熊之允と言ったが、二歳の時同藩医赤川玄成（本道医、人見法印慶安伝、食禄百七十二石）の養子となり、成長して通称を玄櫟と改め、明治六年に迂一と改めた。養父玄成は小石元瑞の門人で、藩主毛利齊元の侍医や、藩の医学館教授やその他の要職をつとめた人である。

玄櫟は医学及び蘭学は、はじめ養父より学び、安政元年二月より医学館の入舎生となり、翌二年舎長役及び引痘掛